

日韓語の名詞化の談話・語用論的機能に関する対象言語学的研究

著者	KIM JOUNGMIN
号	6
学位授与番号	91
URL	http://hdl.handle.net/10097/36938

KIM
金

JOUNG
廷

MIN
珉

学位の種類 博士(国際文化)

学位記番号 国博第91号

学位授与年月日 平成20年3月25日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科(博士課程後期3年の課程)
国際文化交流論専攻

学位論文題目 日韓語の名詞化の談話・語用論的機能に関する対照言語学的研究
-「のだ」と「것이다(KES-ITA)」を中心に-

論文審査委員 (主査)

教授 堀江 薫 教授 吉本 啓
教授 杉浦 謙介

論文内容の要旨

1. 研究背景と研究目的

本研究では日本語と韓国語において顕著に見られる現象として名詞化(nominalization)を取り上げ、日韓両言語の談話における名詞化の機能について機能主義言語学、言語類型論、語用論等の観点から対照を行った。具体的には(1)日本語の「のだ」とそれに対応する韓国語の形式(2)「것이다(以下「KES-ITA」と表記)」を研究対象とし、両形式の談話における機能的類似点と相違点について考察を行った。

(1) [遅刻して] バスが遅れてきたんです。

(2) 우리 나라는 오늘로서 자주국가가 된 것이다.

Wuli nala-nun onul-lose cacwukwukka-ka toy-n kes-ita.

我々 国は 今日で 自主国家が なる-過去連体形 KES-ITA

「我が国は今日で以って自主国家になったのだ。」(신선경 1993: 119, 下線は筆者による)¹

日本語の「のだ」に関しては「のだ」の呈する多様な意味・機能から、以前から数多くの研究者によって取り上げられてきた (Kuno 1973, 田野村 1990, 野田 1997, 益岡 1991, 2007など)。例えば、日本語の「のだ」について益岡 (2007: 9-10) では、「食べる／食べます」のような「普通体と丁寧体」の関係は対話文において必須の存在であるのに対して、「食べる／食べるのだ」の関係は「のだ」を選択しなければならないという関係ではなく、「のだ」を使用するかしないかの問題にすぎないと述べられている。

これらの説明は、日本語を母語としない日本語学習者にとっては、一見、日本語の「のだ」という形式は、随意的な文法形式であるかのようにも捉えられる。しかし、それであればなぜ「のだ」文は日本語の自然な会話において欠かせない要素であるほど (近藤 2007: 68) に、日常会話において頻出、多用されるのであろうか。また、日本語母語話者にとって (3), (4) のような日本語学習者の発話に違和感が感じられる理由は何であろうか。

(3) <コース終了時のアンケートの書き出しで>

授業でいろいろな新聞記事を読んでいて楽しかったのです。(名嶋 2007: 258)

(4) <具合が悪そうな人に> 「? 病院へ行ったんですか。(近藤 2006: 68)

以上のような背景を研究の出発点とし、本研究は日本語と最も多くの類似点を有する韓国語との対照を通して、両形式の機能について理論的考察を行い、両言語の類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、1つの観点から「のだ」の機能に関する全体像を把握することは困難であると考え、以下に示す2つの分析方法を用いた。

1つの分析方法は名詞化の機能拡張という観点からのアプローチである。これは、日本語の「のだ」と韓国語の「KES-ITA」がそれぞれ「の」と「kes」という名詞化辞を基盤にしている点に着目したアプローチである。具体的には、言語類型論における「証拠性 (evidentiality)」(Aikhenvald 2004) の概念を援用して、両形式を、(I) 証拠性表現としての機能拡張、(II) ネガティブポライトネスの表示機能、という2つの観点から分析した。

もう1つは、「のだ」「KES-ITA」というそれぞれの形式 (構文) が、実際の談話においてどの

1 以下、韓国語の例文の表記に関しては、[韓国語 - Yale 式 - グロス - 日本語訳] の順に示す。また、両言語の対応関係は下線 () で表示する。

ような機能を担っているのか、文脈や発話状況によってどのような意味を体現しているのかを分析するアプローチである。

日本語の「のだ」はこれまで多くの先行研究で指摘されているように、文脈による用法の広がり
と意味の多義性を示す(例(5),(6))。この点は、単に「のだ」が共起している1文だけを研究
対象とすると、その特徴や性質に関して十分な説明ができず、2文以上からなる談話を用いて分析
することの重要性を示唆している。

(5) <本を探していて> あ、そこにあつたんだ。(気づき・発見)

(6) <子供に向けて> ほら目を閉じてないで、よく見るんだよ！(命令)

そこで本研究では、日韓語の(対訳)小説などを用いて「のだ」と「KES-ITA」の分析を行っ
た。しかし、日本語の「のだ」に関する先行研究に比べ、韓国語の「KES-ITA」に関する研究が
不十分である点を踏まえて、まず、韓国語の「KES-ITA」の用法について、コーパスの用例に基
づいて記述を行った。その上で「のだ」と「KES-ITA」の機能について対照する上での道具立て
として、野田(1997)による枠組みを参照・援用し、言語類型論の文法化(grammaticalization)
における意味変化(semantic change)のメカニズムである、「主観化(subjectification)」「間主観
化(intersubjectification)」(Traugott 2003)と関連づけて両形式の談話における機能について考
察を行った。

3. 分析の結果

まず、1つ目の分析方法による考察の結果、(I) 証拠性表現としての機能拡張において、日本
語の「のだ」は(i)明示的、非明示的証拠に基づいた推論形式、(ii)談話において話し手にと
って驚きを表す用法(mirative)、の両方において機能拡張が見られる。これに対して、韓国語の
「KES-ITA」は(i)の機能を有するが、日本語の「のだ」に比べてその使用に制限が見られた(例
(7),(7')を比較)。一方で、(ii)の機能においては「KES-ITA」は談話において頻繁に用いら
れることが分かった(例(8))。

(7) A: あ、道が濡れている。

B: 昨日雨が{(i)降ったんだ。(ii)*降った}。

(7') A: 어? 길이 젖어 있네.

E?	Kil-i	cec-e	iss-ney.
あ	道-が	ぬれる-連結語尾	いる-終結語尾

「あ、道が濡れている。」

B : 어제 비가 {(i) ? 온 거야. (ii) 비가 왔나 보다.

Ecey pi-ka {(i) ? o-n ke-ya / (ii) wa-ss-na pota }.

昨日 雨-が 降る-過去連体形 KES-ITA 来る-過去-みたいだ

「昨日雨が (i) 降ったんだ / (ii) 降ったみたいだ。」

(8) ² 오늘 학교에서 문득 창밖을 봤는데 해가 떠 있는데 비가 오는 거예요.

Onul hakkyo-eyse mwuntuk chang-pakk-ul pwa-ss-nuntey hay-ka

今日 学校-で ふと 窓-外を 見る-過去-逆接 日-が

tte iss-nun tey pi-ka o-nun ke-yeyyo.

昇っている-逆接 雨-が 降る-現在連体形 KES-ITA 終結語尾

「今日学校でふと窓の外を見ていたら、日が昇っているのに雨が降っているんです。」

また、(II) のネガティブポライトネス表示機能に関しては日本語の「のだ」に見られるような機能は韓国語の「KES-ITA」にはほとんど見られないことが分かった (例 (9), (9') を比較)。

(9) お願いがあるんですが...

(9') * 부탁이 있는 것인데요...

Pwuthak-i iss-nun kes-i-ntey-yo...

願-い-が ある-現在連体形 KES-ITA-接続表現-丁寧

「お願いがあるんですが...」

次に、2つ目の研究方法による考察の結果について述べる。まず、韓国語の「KES-ITA」について、テレビニュース、新聞の社説、テレビ番組の談話など、様々なジャンルに表れる生起頻度及び用法を調べた。その結果、(10) のように、先行文脈 (□で表示) の内容を後続文で具体化する際 (波線 (~~~~) で表示)、「KES-ITA」は用いられやすいことが分かった。

(10) <為替市場に関する報道>

외환시장에 오후 들어 누구도 생각지 못 했던 일이 벌어졌습니다. 그동안 환율 급등을 막아오던 외환당국이 갑자기 개입을 중단해 버린 것입니다.

2 <<http://kin.naver.com/db>> (2007. 10. 18)

Oyhwansicang-ey ohwu tule nwukwu-to syangkak-ci mos hay-ss ten
 外貨市場に 午後 入って 誰も 考える 否定 過去回想
 il-i pele cye-ss-supnita. Ku tongan hwanyul kuptung-ul
 ことが 起こる 過去 丁寧 その 間 為替レート 急騰を
 maka o-ten oywhan tangkwuk-i kapcaki kayip-ul
 防いでくる 過去回想 為替 当局が 急に 介入を
 cwungtanhay peli-n kes-ipnita.
 中断して しまう 過去連体形 KES-ITA: 丁寧

「外貨市場に午後に入って 誰も考えられなかったこと が起こりました。これまで為替の急騰を阻止してきた為替当局がいきなり介入を中断してしまったのです。」

また、日韓対訳小説を用いて両形式の対応関係を調べた結果、表1と表2に示すように、日本語が原本で韓国語に翻訳した場合（「(J) → (K')」と表記）、また、その逆の場合（「(K) → (J')」と表記）の両方において、「地の文」では両形式は対応する度合いが高いが、「会話文」においては対応関係のずれが見られた。

表1. 「(J) → (K')」における「地の文」「会話文」の対応

区分	「のだ」	韓国語の対応	対応率 (%)
地の文	126	51	40.5%
会話文	98	20	20.4%
合計	224	71	

$$x^2=10.25, p<0.1$$

表1. 「(K) → (J')」における「地の文」「会話文」の対応

区分	「KES-ITA」	日本語の対応	対応率 (%)
地の文	82	55	67.0%
会話文	70	35	50.0%
合計	152	90	

$$x^2=4.55, p<0.5$$

しかし、「KES-ITA」は「会話文」において(11)のように従属節で「理由」を新情報として述べ、主節の旧情報の内容を限定する際には「KES-ITA」は用いられやすいことを指摘した(図1を参照)。

(11) A : “왜 우니?” B : 너무 아파서 우는 거야.

A : Way wu-ni?

なぜ 泣く-の

B : Nemwu apha-se uw-nun ke-ya.

とても 痛くて 泣く-現在連体形 KES-ITA 【9살】

(11') A : 「なぜ泣いているの?」

B : 「とても痛くて泣いているんだ。」

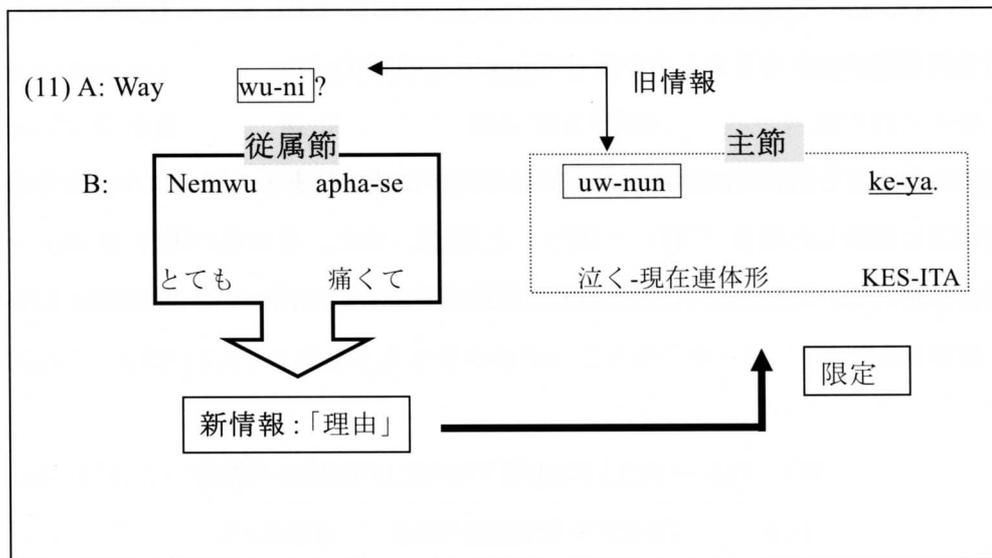


図1. 「理由」を表す複文における「KES-ITA」の文構造

また、日本語と韓国語で書かれた小説からそれぞれ「のだ」と「KES-ITA」の用例を抽出した。その上で、野田（1997）による「のだ」の分類を参照して両形式の用例を「対事的」「対人的」機能に分類し、生起頻度を比較した。その結果を表3に示すように「のだ」は「対事的」機能に比べ「対人的」機能の方が上回っているのに対して、「KES-ITA」はその反対の傾向にあることが分かった。

表3. 調査結果

	対事的	対人的	合計
日本語	46 (43.4%)	60 (56.6%)	106 (100%)
韓国語	31 (70.5%)	13 (29.5%)	44 (100%)

Ka-se	pal	ssisku	o-lako	hay-ss-ta.
行って	足	洗って	来る-と	する-過去-終結語尾

『足を洗って来い。顔も洗って。』(略) ぼくはしばし放心状態でぼうっと突っ立っていた。
『足を洗ってこいと言った。』

(14') 『足を洗ってきなさい。顔も洗って。』(略) ぼくはしばし放心状態でぼうっと突っ立っていた。『足を洗ってこいと言ったんだ。』

なお、このような相違点は「のだ」と「KES-ITA」以外の、両言語の文法形式（日本語の終助詞（Kamio 1994）、引用構文（Shinzato 2006）、二重使役構文（Ishihara, Horie, and Pardeshi 2006）など）にも見られる現象であることを指摘した。

4. 結 論

本研究では、日本語の「のだ」と韓国語の「KES-ITA」を研究対象に、両形式の談話における機能的類似点と相違点について、言語類型論の知見を援用し、日韓対照の観点から考察を行ってきた。

今後の課題としては、以下の (i) - (iv) の4点が挙げられる。

- (i) 話し言葉、自然会話データに基づく「のだ」と「KES-ITA」の対比
- (ii) 両形式の変異形に関する考察、「のだ」文と非「のだ」文の相違及び
「KES-ITA」と非「KES-ITA」との相違（例：社会言語学的研究）
- (iii) 研究対象の拡大（例：「わけだ」「ものだ」「ことだ」など、名詞化構文全般）
- (iv) 日本語学習者を対象とした実証的研究（例：第二言語習得、日本語教育など）

論文審査結果の要旨

本博士論文は、対照言語学の観点から、日韓語の名詞化構文、特に文末で用いられる日本語の代表的な名詞化構文である「のだ」と、それに対応する韓国語の「것이다 (KES-ITA)」の談話・語用論的機能の対照を行ったものである。日本語の「のだ」は、「説明」といった機能を有する構文として話し言葉、書き言葉を問わず多用されるが、文脈的に様々な語用論的な意味を持ちうるため、母語話者にとってはもとより外国語を母語とする人にとって習得が困難な構文として知られ、これまで多くの研究がなされてきた。

本論文の意義は、(I) 日本語と類似性の高い韓国語の名詞化構文に着目し、特に「のだ」に対応する「것이다 (KES-ITA)」との談話・語用論的機能の対比を、名詞化辞の「機能拡張 (多機能性)」という観点から行い、日本語の「のだ」の方が「것이다」よりも多機能的であることを実証した点、(II) 両者の相違点を「主観化」「間主観化」という文法化に伴う意味変化の観点から考察し、日本語の「のだ」の方が韓国語の「것이다」よりも「間主観的」機能をより発展させていることを明らかにした点、にある。

さらに、本研究は、上述のような理論的な観点からのデータの考察のみならず、(III) テレビニュース、新聞社説、小説等の様々なジャンルの媒体における、「のだ」「것이다」の変異形 (variants) の種類や生起の仕方を調査し、そこから両形式の対応関係について興味深い観察を導いている。これは、近年注目を集めている「用法依拠モデル (Usage-based Grammar)」に通じるデータ主導的な分析の試みとして (I) (II) の理論的な観点からのデータの考察を補うものである。

本研究は、これまでの日韓対照文法研究の中で、文法化研究・機能主義言語学の成果を積極的に援用し、様々なジャンルのテキストから構築されたコーパスにおける「のだ」「것이다」の実例の詳細な文脈分析に基づいて名詞化構文の語用論的機能の対比を行ったオリジナリティの高い研究として高く評価できる。それを裏付けるように、本論文の一部は採択率の厳しい国際学会においても採択され、すでに国際学会予稿集 (査読つき) に採録されているほか、国際学会誌にも採録がされている。

本論文によって著者は自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示したということが出来る。よって、本論文は、博士 (国際文化) の学位論文として合格と認める。